

広島森さんら リリー賞を受賞

精神障害者の自立支援



森浩昭さん

り、福祉作業所の活動に
ビジネスの視点を持ち込
んで運営の支援を続けて
いる広島市中区、料亭支
配人森浩昭さん(45)ら二
人と二団体が受賞した。

(19面に森さんの横顔)
主催する「精神障害者
へのアンチステイグマ研

究会」代表の佐藤光源・
東北福祉大教授らが受
賞者に表彰状と副賞を手
渡した。

精神障害者自立支援活
動賞(リリー賞)の授賞
式が五日、東京都内であ

広島県内の多数の作業
所と企業を結び、製品
の開発や販売促進などを
支援している森さんは
「お互いにメリットがあ
る関係づくりを心掛けて

きた。今後は福祉の現
場と社会をつなぐ人材
育成にも取り組みたい」
(北村浩司)



精神障害者自立支援活動賞(リリー賞)を受賞した

もり ひろあき
森 浩昭さん(45)



障害者が自立をめざして働く福祉作業所。その商品開発や販売を支援する活動を十五年続けてきた。「みんなが得をするやり方でない」と長続きしない」が持論だ。

広島市の、ある作業所は、材料費の高さに悩んでいた。ガラズ会社に掛け合い、余ったビーズを提供してもらった。できた

アクセサリーは人気商品に。ホテルの結婚式で使う名札立ては、本業の料亭で出たかまぼこ板を再利用。木工の得意な作業所が新郎新婦の人形に加工し、評判を呼んだ。

会社勤めを経験した後、家業である広島市中区の老舗料亭に入った。当時の経営者だった祖父に「人のためになる商売をしろ」と言われ、思いついたのが福祉だった。金も人もない中小企業に何ができるのか。まず現場を知ろうと訪ねた作業所で、

利益生む仕組み徹底。「みんな得する活動を」

真剣に織物作りに打ち込む障害者の姿を見た感動が原点になった。

しかし、多くの作業所は販売不振で得られる日当もわずか。そこで本業の料亭の営業のノウハウが生きた。どんなものなら確実に売れて利益が出るか、企業のニーズを徹底して聞き、小回りがきく個性を生かす。企業の側には目に見える社会貢献ができる利点もある。「お情けで買ってもらうだけでは、やりがいも得られないし、企業と対等の関係は築けない」

福祉団体や行政、企業の仲間と意見を交わす「福祉を語る会」も主宰する。「誰でも参加できる福祉」が理想だ。「行政も金や人をたっぷり使える時代ではない。それなら技術や知恵を生かすしかない」。福祉をコーディネートできる人材を増やすことに、次の夢をかける。

(北村浩司)